

(1) “言語”と“方言”

“言語”と“方言”

—愛言愛知のたましいからの断章胜説

そでがきのうた(プロローク)

風ありき

風はくさぐさにことばとなりなき

いづくよりと人こそ知らね

むべ全能の神のいますにくまなかりしかば

I

すでに生しよを人間界に得たればこそ、ためにすでにおのずからにたれしにも、すなわちひととしてそのうまれながらとして、すべてを凌ぎすぐれてまさにいんげんたるゆえんのこのあかし、よぶに括って“こ”とば“とのごとく”にためしに洩れずこの形(言語)へ“も

Es war der Wind,

Er ward zu allerlei Worten.

Der Mensch weiss nicht, woher sie kommen sind.

War Gott, der Allmächtige, doch allerorten.

の化(名詞化)にして、もって言いならわすをおしなべてさだめとする、自称ホモサピエンスにのみひとり固有の、たとえばついに悪魔との契約に神を怖れぬまでのわざをもまた、これをもっておこないとげるところ、そんなあやめ(文目)微妙みみょうのしくみとからくりをば

それぞれたがいにあやつりかわして、ときにのぞんで
 はことばあってこそそのうそ、もってうそのためのこと
 ば、そこを目ざしそこより根ざすさらにさまさまのた
 くみといとなみ、もとよりかくのごときの「人間わざ」
 とは、このそのことがらさま、ありさまにかんがみて
 とんとそれ自体まったくイレレヴァント、そもそもな
 んらのかかわりとしてそこにやどすべきことわりあらぬ
 さかいへとおのれまづこのんでこころを逸らし凝らし
 てさながらこの稿をおこさまほしきそのゆえんについ
 ては、ことのおもむきとしていうもさらなり、これに
 みちびかれる本すじへのモチーフまたこもごも、その
 あまりに自明のことさらに属すがゆえに、あまた世に
 布かれて名ある「言語学」の著述のそれらそのいづれに
 あってもわれから銜学のやぼをそこへまで暴けいだせ
 るためしはさすがこれを知らぬ、まことそんなすさび
 にはかつてなんびともことさらに、その、これにいと
 むところなかりつるいたずら、げにもこれ、むべなる
 べしや。およそ動物のうち、その生活に他を排して効
 率たかく空気をほしのままにしているやからとして、

その、鳥類に若くものこそなけれ、これいままさらに言
 うまでもなきからに、かつてこのことをただそのため
 にと目ざして、もってそこへ堂々ふでを弄んだそんな
 わざくれのありしなどは、たえて世にこれを聞かぬ
 次第。駝鳥のごときのたぐいは、もとより論外。いか
 にあたかも飛ぶがごとくに走ろうとも、すでにその
 「飛ぶがごとくに」を出でぬからには、もはや鳥類とし
 てのその資質において根本において欠けるところあり
 と見るべきはしつくれのあぶれ。ただし、二本あしを
 もって立って身をささえるは、鳥類と人類、いっそお
 のれここに注目せざるをえぬとすれば、そのそれぞれ
 に由ってきたるゆえんのもの、またもってあからさま
 なるか。

ついでながらにさらに一言を添えるならば、古来お
 のずからに日本にては、ひとつ、鳥を分けて、なき(鳴
 泣)はしても囀らぬたぐいとなかんづくにしきりと
 囀る——をもつてひとに親しまれきつる——たぐいと
 のこの対立に訴えている。(かつて昔には忌ま忌まし
 いからすのだみ声を、あたら鳥だてらに吠えるよとば

(3) “言語”と“方言”

かりに貶しめて、すなわち「吠える」ととらえていたた
めしました、なきにしもあらず、[〃]ほえる[〃]とは大声たて
てすさまじく興奮めになきわめくことであった。)た
だし、ここにさしあたっては、そもそもさえずるとは
いかなるいとなみぞやの問い——たとえば[〃]唐^かさえず
り[〃]の慣用のごとき、あるいは呪文となえるをも「さ
えずる」と言えるかとおぼしき、はたしてこれを[〃]鳥
語からのメタファ(転移)と見なすをもってその[〃]本義
(*erudoloyka*)[〃]を捉え得たものとなしうべきか——
をも、にわかにこれ、あえてまた、いまはレレヴァン
トにあらずとしておく。(漢土にも[〃]南蛮馱舌[〃]の慣用
あり。ただし、もっぱらこれはベジョラチヴ。)

いやしくも、いまもし、おのれことばのことを職と
するもののこの術学癖からこのんで係わるべきもの
ここにありとするならば、とど、それは鳥の命名論。
いまここにおいてなかんずくに興味をそられるはギ
リシヤ語である。ここには鳥を代表する語形として
ptitsa——これはしかるべき文脈にあってはえらんで
鶏を指すにも用いる——のほか、たとえば匍うもの

(*épanerou* = *L. serpens* 蛇^{にや})に向うを張って、こちら
は翼をもてるもの、もって羽ばたくものこのころから
ra zerevna あり、語形成についていえば、飛ぶの意の
動詞 *zerevati* からの派生ないしそれと同根。すなわ
ち、猛き四つ足(*zerpokrov* = *L. quadrupes*)どもを尻
目に風を切って大空をかける(あまがける)、ここをも
って鳥類の鳥類たるゆえんとする。ダイダロスのせが
れの運命^{きだめ}のその象徴するうらみ、また、いかに人類悠
久の昔から切実なりつるか。

しかしながら、ゆめここに忘れてはならぬ。すなわ
ち、これをその示差の標識として、四大のうちからこ
れのみ目に見えぬが風、このかぜをばほしいままにあ
やつりつつ、もってたましいの息吹^{いぶ}きを吐きすてつづ
けている、そのような被造物の、また、世にあること
を。しかし、俗にいわゆる湯水のごとくにこの比況
を超越して、思うがままにふんだんに、たぐいなく独
自に、かぜこそいのちと吹きすてているその根源とし
てのたましい(= *anima*)の、その、ここにありつづけ
ていることを。ときあってか、ひとりめぐまれてのそ

のかぎりなき使いすて、ただほど高いものはないことをおのれその身におぼえしめられもする。すなわちもつてこの使いすてへのむくい、くちずさみにいわく、口は禍いの……(云々)、西諺にはおなじ趣旨をうたうに、口ではなしに舌(*narator*)をもつてする。これのばあい、ここにことばのいとなみからいとなみを捨象して、もつていとなみとしてのことば、これを「もの化(hypostatise)」して示唆すべき慣用の *narator* は、すでにたんに語源的にメトニミー(換喩)たるにとどまらず、いいうべくんば「共時論的語源」へひとの意識をこそぐる「一語多義」のかけことば。

ひるがえって思うに、文化の伝統のその歴史の連続としての生命は、個を超えて民族を貫いて隠然と重いためし、また、しばしば、ただにギリシヤ・ラテンの古代の発想に終れるにあらず、印欧語圏の文化の、その、舌すなわち体をもつて言語すなわち用の象徴とする、この体用一如の表現また、今に久しき慣用。ここをもつてしてまた、さらに推して知るべし、意味はおとである。すでに示唆せるがごとく、ことばのたまし

いは、エレメントとしての風である。この、古代の、それなりの形而上学は、それ自体においては、いまからはもはやつとに死んでしまつてひさしいけれども、しかしながら、いまでも意味はやつぱりおとである。おとが意味であるこの見てくれこそことばの、その、ことばたるのゆえんである。ここに言語の現象学としての言語学のその始源がひそむ。はじめに風ありき、ロゴスは風なりき。

意味はおとであるという、この、日ごろ好んで口にする、また筆にもおぼせている逆説についてここに方便それ自体の形相の純粹直観に四角四面に身がまえてのとりにくみは俄かにいまおのれが力のよく及びうるかぎりならぬけれども、別途、もう一つここに、これもことさらにあらわには、しかり、ことごとしくここにこだわつてそれをもつぱらとする形では、ひとの、その、これをふでにのぼすところとおそらくしてきていないと思うことがらとして、けだし、これまたすでに言わでものことと、もつてないがしろにせられきたりしにやと思ふことがらとして、それゆえにいっそお

(5) “言語”と“方言”

のれ、あえて言及しようと思うところのもの、それと
いうのは、およそ動物のうち、言語器官を身にそなえ
ているのは、ひとえに人類のみという、この隠れもな
き事実。もとより、それ自体においてはなんの曲もあ
らぬ、ただそれだけの所与としてのこと。ただし
それにもかかわらず、ここには多少とも言い添えてお
くべきを可とすると思われるゆえんのものなきにし
もあらず。けだし、“言語器官”は、消化器系とか循環
器系とかいった相互に排他のこのあり方をもってして
それ自体における統一のもとに独自に人体の組織のそ
の一つとして具ってはいない。ここをもって、それ自
体における“言語器系”なる概念は、すなわちそこまで
は、もはや無用と、むしろいままでのところ、暗々の
うちに言語学は、この線の方をとってきているかも知
れぬのである。そして、これも、いっそひとつ、なん
のけれどもない素朴なたちばとして、それだけにそれ
なりには堅い、であろう。それ自体における肉体の所与
に臨むにむしろソフィステイションを厭いしりぞ
けたまっとうな把握でもあろう。しかしながら、機能

のタームズにおいては、それ自体における組織(体系)
としてインテグラルな——有目的に原理に貫かれて
完結した——“言語器官”、かく呼びうべき機構体(オ
ルガニスムス)をそれとしてあなたさまにうけとめみ
とめるべきである、と、やっぱりわたくしはそう考える、
考えている。たとえば、もし舌は食餌を味わうために
——消化器官の一つとして——ではなく、じつはもっ
ぱらことばのいとなみのためにあるのだと、もしこの
ように、義的にことあげするならば、これはむしろ誇
張のこじつけにすぎぬべきも、おのれ人類として人類
はなんのためにまた舌を奉仕せしめているか、いるの
か。すなわちこのように問うならば、そもそも人類が
動物として生得の諸器官を、動物そのまゝにおいてに
はあらず、その、たんにそれとしての生命の維持の段
階をいなみのりこえて、他にはこれを見ぬたましいの
いとなみのための手だてに、独自に選択し多元的に綜
合して、もって新たな機構(メカニズム)からくりの
組織(体系)をそれ自体のためにたくみだしているこ
と、すなわちいまや逆説的には、“言語器系”という体

系をあえてそれとして別途あらしめぬホモサピ、エンスとしてのそのかしこき、すでにこれ自明の所与、もつて截然おのれを他からぬきんでしめている、しかり、他の動物からおのれみずからを本質的に対立的にきわだたしめている。せつかくこのゆえんを否定のことはへ裏かえしてだめ押しするならば、言語器官そのものが民族々々によって異なるといったことなどはありえない。もつてふたたびこれを表にかえしてさらにいふならば、こんどはいわく、そもそも *homo alatus* とは、この形容矛盾こそそのままのいのちと。いかなる *homo sapientissimus* といえども、いっそついに *homo loquens* としてありつづけるからは、どのみちつねに自然言語に呪縛されている。(たとえ唐突、かつは逆説のきらいまたあるべきも、「言語相対主義」のついの母胎は、この呪縛への諦観である。)

そもそも人類のその人類としての存在にとつてまきにおのずからなる、もつて「民族」の統一のこのインテグリティにあずかるべく各自相互にむすばれるそのひとりびとりそれぞれは、その、むすばれるゆえんの本

質としてそれぞれそれなりに生れながら、習慣的に身につけた、すなわちおのれ母おやからいわば口うつし耳うつしの、いやおうなしのこの *natural language* にまず *homo* として呪縛されているのである。そうであるかぎり、ときあつてか見かける *homo loquens* の、この、表現は、じつはむしろ、ことばのあやとしての強調である。「自然言語」というこの慣用が学問の世界においていやましにひろく堂々と濶歩するゆえんまた、それなりにはそれなりに明らかであろう。

もつとも派つて言えば、L・イェルムスレウのように、いやがうえにも言語の形相直観へみずからをきびしく持する、ためにいきおい、また蔽いがたく神経質な「性格」は、「いわゆる」のまくらことばを冠らせるの用意をもつてしてこの慣用を使わざるをえなかつた。さればこそあれ、いっそこにおのれ学問だての精神は、あえてまたおのれなりにこだわる。いわく、「いわゆる」のその象徴するゆえんのシグニフィカンスはそんなんぞや。けだし、この、あたかもはぐらかしのまくらことばこそ、なるべきかぎりコミットせざらんが

(7) “言語”と“方言”

ためのアトリブートなるがゆえに。ここにこそ言語は
おのれその本質をまさに逆説的にさらけ出すべければ。
くりかえしいう、それ自体における言語器官のこの
生得の具足に民族々々によってその各別であるという
相異はありえない。しかしながら、“ことだま”をして
——ここが言語の、その、“文化”たるゆえん——神はそ
れぞれの人間集団にそれぞれに独自の、そこにそれと
して共同に固有な、すでににんげんのものとしてのお
と、この、非連続の分節の単位としてのその、選択をす
なわち“種(species)的に”せしめたもうた。バベルの
塔のものがたりとおのずからにうらはらであろうと
も、はじめてその選択によっておとは、ことばとなる。
もって意味に、意味の象徴に、羽化する。それぞれに
あなたがまに歴史的にそれは“文化言語”として諸言語
に自己形成をとげる。(いまわたくしは言語の契機、
double articulationのその根源に浜って語っているの
である。いささかも“二重分節”についてそれを無視し
たり看過したりしてゐるのではない。くだいけれども
言っておけば、その反対である。)

いま述べるこの《“ことだま”のミュークス》——そ
れ自体におけるなぞ、としてこれをそのままのこすと
ころのこの、言語起源多元観——をもってわたくしは、
擬するにバベルの塔の新しい版(version)とする。し
かしながらそのかぎりにおいてまた、諸言語それぞれ
はおのがじし“おと”の、その、無限に変幻する万華鏡
である。詩人とは、その想像観照へとひとをしておぼ
れしめるのわざにおのれこのころをやつす“感覚主義者
(Eng. aesthete)”である。ひとは、ことばのためのこ
とばのこの美の世界にあそぶ自由をもつ。もつとも、
“万華鏡”の隠喩(陰喩)をもっておのれ言わんとほつす
るゆえんのこのころについて、ましてやことばのいとな
みとしての“言語”のついにそこに帰すべきまぼろし
(鏡照性)としてのその本質について、いまはこもごも
いささかの敷衍をなしえないけれども、あえて形而
上学的さかいへあそぶ野心のごときは懐かず、“科学”
のチームズにおいて語るかぎり、かれ(言語器官のそ
の生得性)とこれ(おとの選択のこの、それ自体における
歴史性)とにそれぞれ応えるものとして生れたのが音

声学与音韻論である、(と、わたくしは言語学の潮流をひとつ回顧的にこのように集約する)。すなわち定義上、そもそも音声学には一般音声学しかありえない(はずである)。ペンギ英語音声学とか日本語音声学とか呼ばれるところのこれら領域は、それぞれに特殊音声学として、「音声学」の、その、ある位相でしかありえない。それは、理論的には、一般音声学の、その、ある自己顕現(Self-manifestation)である。「科学」のいとなみとしてのこの実践のタームズにおいてこれを見れば、そのような「顕現」は、いわば「アニメの現象学」をおのれその始源と仰ぐべき、おのれその存在根拠をそこに派らしむべき、もってこの可能性にもとづいてそれ自体としてはそれ自体における自律の科学(Fachwissenschaft)、すなわちこのそれ自体のための一般音声学のその原理の適用であり、そういう実験である。かかるかぎり、ついに音声学は単一である。(もとよりそうでしかありえない)。そのかぎりでは、「一般」というまぐらことは、論理的には無用の用をそのいのちとし、もってここにその役割をすでに全う

するのみ。(それ自体における音声学をもつて言語学の補助科学と貶しめるも、それはそれにてよろしかるべし。けだし、かかるたぐいのあげつらいは、それ自体におけるかぎり、学者かたぎにおけるソフィストばりとこれを貶とめてよろしかるべきをもつて)。

このような音声学のそのありさま(本質)にたいし、音韻論のがわにとつては、それ自体のための一般音韻論というものは、それ自体においてはむな(実無)、すなわちむな(空)しい。その本質は、おとの、すなわち、よみ(意味)のための、たんにそのためにそのかぎりでしかしレレヴァントなる技術としての「音韻論」といふべき存在にとどまる。けだし、その内実は、—— かりに「内実」ということがここにそれなりに許されるものとして、すなわちもとよりそのかぎりであえてペンギいうのだが、要するにそれは、—— 「音韻」をとりあつかうに独自の、その操作のためのみち(途)方法)としての、この技術の(ための)ことは集、すなわち術語集である。ことわりのその趨くところ、術語のための定義集にはかならぬ。無矛盾性のために完璧

(9) “言語”と“方言”

に定義された術語は、それ自体においては空虚である（はずである。けだし、理想的には「であらねばならぬ」はずであろうから）。もってそのかぎりでは、たといまだそれ自体においてはあるいは草案にとどめしめるつもりのものであったかも知れぬせよ、かつてやはりブラハ学派音韻論欽定憲法といつたものがそれとしてそれなりにあった（ということができる。いな、匿名のもとに提出された「憲法草案」のちにトルベツコーイが個人として世に送った小冊子『Anleitung』を思い浮べられるもまた可）。また、かえりみれば、かつて一九五〇年代の前半、アメリカには、多かれ少なかれ、あるいは直接になり間接になり、どのみちおのずからにお国がら、伝統のプラグマティズムの精神にこたえて、フォウニーム(phoneme)はGod's truthか focus-pocus かといつた、そんな議論もありましたっけ。もつとも、じつはそんな昔がたりは、むしろ、もはやどうでもよろしかるべく、いまも音声学は、けだし非字母表記の煩瑣も、ときにのぞんではこれに頼らざるをえぬそのレレヴァンシをいなみがたかるべきも、

おしなべては、ひきつづき〔のなかにローマ字を書きこむいとなみ、これにみずからを対比せしめて音韻論は//のなかにローマ字をさらにあらたに書きこむいとなみ。いいうべくんば〕のなかのローマ字を真に理想的な——のぞむらくはかくあらまほしきそのような——ローマ字表記として//のなかへ「再ローマ字化」せんと目ざす文字論。（ここの本稿には、いましりぞいて「識別的特徴」のレヴェルに浜り、もって〔と//について、これらおたがいの相関の關係のタームズにおけるレレヴァンシにまで立ちいることは、当面これを無用とする。//のなから「ローマ字」をはずして一人歩きせしめ、以て文字をもたぬ言語にそれを文字としてあたえんとするの善意は尊い。ただし、文字としてアルファベット体系がその究極のものであるかいなか、これはことがまた別。けだし「文字」とはおとをそれ自体のために代表する図柄にはあらず、窮極的には適切に意味を示唆する手段であるべきがゆえに）。

要するに音韻論とは、これの方は、それぞれに独自の固有の方言々々——見かた次第では、すなわち、いわ

ば、歴史としての所与の世界をこえてそのあなた、理論的にはかぎりなく多数なるべき——をそれぞれにしかるべき自己完結の体系として体系ごとにつびとつあなたさまに分析と記述の対象にすえ、もつてこの言語のその《たましいの息吹としての“おと”の体系》のその構造のタームズにおける“音項”の分類目録をすなわち“意味”のためにしたてあげるいとなみ、たとえば体系(音韻体系)のタームズにおいて“促音”(と、すでに倭族語のその性格にたいして伝統的に日本人の直観がただしく抽象してきた単位)を、もとよりローマ字化そのものが自己目的にはあらぬにもせよ、あらたにローマ字のQに置きかえて、もつて体系のためにそこに組みこむいとなみ。(あえてせつかく、ほんの老婆心からとは言え、やはり言いそえておくならば、いわばOにしっぽを生やしたそんなローマ字の形それ自体にひとは素朴に惑わかされたりおびやかされたりすることは、すなわちもつていやしくもいたずらにおびえなどすることは、ない。それ自体における“促音”をそれとしてユニークの、すなわち単一の、しかるべき自己統

一として代表せしめるためのその視覚化にそれがQでなければならぬ必然性は、[]との相関においてならそこにあるべくもあらぬゆえ。すなわち、できあいのローマ字をもつてしてはただちには蔽いきれぬゆえんの、もし根源的にいえばアルファベットには手に負えぬ、そもそもそれは別個の原理から独自に歴史的に選択された文化としての単位であるがゆえに、一向にQであつてかまわぬ次第)もとよりいま遽かにそれ自体における“音項”のこの再記号化のその肆意性と必然性とを音韻論の本質のタームズにおいてあげつらいうるのかぎりにはあらず。しかしながら、音韻論が“文字論”であるかぎり、逆はそのまま現実に経験的には成りたたぬけれども、文字論また“音韻論”である。だからこそ音韻論は文字論に帰するのだ。さらに逆説的には音韻論は“意味論”である。この含意の敷衍は無用であろう。しかしながら、せつかく言いそえておくならば、漢字は諧声の原理を確立してその自己完成をとげた——。そもそもそれ自体における“言語”は、もしいうべくんば、もとより直観にとつてはあからさ

(11) “言語”と“方言”

まといえ、言語学のそとに茫洋とひろがってきまるところを知らぬ宇宙である。それは、それなりにそれとしてあるべからしき“秩序”であることをばひたすらにもとめてひとがみずからに欲するゆえんのそのようななにもかであることをそのありさま(本質)としてありつづける。これは経験論的ではなく、——“直観”をすりかえて虚妄の神秘へひとをいざなうことばの綾などをあえていたずらに弄ばんとするものにはもとよりならず——、それ自体において本質的に論理的に言語が言語学に先きだつの謂なるのみ。この含意をいま、“渾沌”のやみに光をもたらずものこそ言語学であると信ずるかとおぼしき素朴なこの神話とはうらはらの哲学的な立場から、あからさまにいえばしかしながら非合理主義の観点にもとづいて展開することは、もはや本稿の範囲をこえているべきも——。

ことにつけ単純な誤解のなにごともあることへの惧れのその避けがたきは世の常、それはまぬかれがたくともせつかく表現をむしろ逆説もどきに装って、もってさらにひとこと言い添えておくとならば、いわく、

言語とはメタ言語である、と。(言語が言語でありうるのは、言語がそれ自体においてメタ言語なるがゆえなり。言語が言語たるゆえんは、すなわち言語がその根源においてメタ言語たるにあり。もって“言語学”がものをかじらぬ、こそこそ馳走なんぞ曳いてゆかぬネズミのその本質のために生れうるのである。)

ただ、しかしながら、“ことば”ということばはいかなることばなりやを述べるにすなわちことばをつらねて展べてゆくそのかぎり、おなじくことばをもってする、この、このことわりとしてのそのきりのなさ、いっそのかの、二十世紀の言語学者としてさながらその筆のはこび最も論理の含蓄にとみ思考の滋味にあふれる個性のE・バンヴニストがたまたま巧んでかすった感銘ふかき一句のあるをもってそのまま借りておなじくもはや一節のむすびにすえる、すえることとする。

ためにまた、しかしながら、あえて乞わまくは、ただし、それをここに和げるに、しいて原姿にしるき碑銘体にならわず、かつは趣きを転じて原姿には(esi)とあるをわざと過去への回顧の姿にひるがえすがごとき

のわざ、すなわちおのれはおのれのついにおのれなりの肆意、なべてひとえにこれを咎めたもうことなかれかし。

Nihil est in lingua quod non prius fuerit in oratione.

そもそもいまだかつてくちずからにさながらならざりつるにすでに「舌」にそのおぼえありつるがごときゆえんのものをはたえてよにあらざりき

(注)《言語なるもの》を指すに換喩として人体のべろ(舌)をもつてするならいが印欧諸語を通じてのその特徴であることは、この所与が印欧語文化圏にのみにかざられるの謂にはあらず、しかしいま歴史的に派っていつて視野を古代オリエント文化圏へまでひろげるのいとまはない。いな、けだしその要は、いまはないものとする。

II

たとえ体系であることを「ロゴス」としてのことばは、もとめてみずからに欲しつづけてやまぬにもせよ、また歴史的には悠久のむかしよりその線において自己完

成を目ざしつつ、もって瞬時も欠けずかぎりなくゆれつづけてゆれつづけゆくものと見るべきがそのありさまに適わしきか知れぬけれども、そもそもそれ自体における現実の諸言語はその体系性においてどのみちげんにつねに a-systemic である。すなわち、この、その自己矛盾こそが諸言語の「言語」としてのそれぞれの本然の姿、それ自体におけるありさま、もって歴史としての言語のそのありかた「生きさま」であるはずである。しかしながらもとより (a-systemic) とは (a-systematic) の謂にはあらず。すなわちそれとしてのこの否定の含意は、《言語学のための言語》が体系としてアドホックに仮設されうることをそれ自体においてこばむものにはさらさらあらぬのころ、けだし経験科学としての言語研究のたちばにとつて、この、体系性のための体系の仮設は、思考のいとなみに論理の一貫性において内部的に矛盾なきそのかぎり、もともと論理的に循環を不可避の前提として、このこと自体はおのれの問うところにあらぬゆえ。そのかぎり定義上 lingua の学は、すなわち glosseme (〈γλωσσεμ L. lin-

語学としてこの仮設をすでに自明のものとするならば、およそ世界にどれだけの“言語”があるかといった、この“あり”についての問いは、どれだけの音韻体系の記述と分類とが、現実になにをさしおいても、それ自体においてまず必要であるかのこの問いにまず帰するこゝとなるであろう。しかしながら言語の本質にかんがみるならば、すなわちその本質へのそれなりの直観をそれなりにふまえてほりさげて考えるならば、だからとて、——すなわち音韻分類(論)と音韻目録作成の、その、それぞれの“言語”についての成果そのものはたとえそれなりにいかにもあれ——、かの問いそのものがどこまでたして根源的にレレヴァントでありうるか、これは、また、それとしてことが別。けだし、ゲルゴという概念がいかにしてあなたさまにもの化しうるか、そういう抽象がどこまでいかにして妥当なるべきか——。“言語”がエルゴンでなくエネルギーであるという要請は、エネルギーでないエルゴンでそれがあるとするれば、それはその本質において言語ではあ

りえないの謂と、すなわちまた、解せられる。ただし、いまここからたとえただちに“方言”のその空間的連続性へふでを及ぼしてゆくといったこのたぐいのいとなみへのいとまはない。ましてや、なにも、それらについて、そもそも“哲学”としてはその卑俗なる、あたかも応用数学の、その、数学としての卑俗さにたぐうべき、そんな“文化哲学”に甘んじてそれとして帰属せしめらるべきいまはそのかぎりにおける言語哲学にわざわざおうかがいをたてるまでには、またあえて及ばぬ。ちなみにいえば、もし“ロゴス”ということばをここにあらたにいま手ばなしに使うことにひとまずもとにかく許されるならば、ロゴスとしてのことば、この本質への無限の追究は、文化哲学としての、そのかぎりにおけるところの言語哲学には、また、その及びうるさかいにあらぬ。

ここに一つ、しかしながら、いいうべくんば、そもそも形而上学へのあげつらいは、たとえその思弁がそれとしていかに深遠にてもこそあれ、いまはいっそそこ退け、もってげんにあからさまなこと、それ自体に

おいて確かなこと、まさにそれこそはすなわちほかならず、はるか昔にまで溯って「言語」と漢字に書くこの形なら、もとより文献に徴証として容易にこれを拾うことができるという、このことである。すなわちそれは、日本の伝統においては、「ことば」という、この、倭族語本来の慣用にたいするよそゆきの代替としてしばしば筆にのぼされてきたもの、大づかみには、「ことば」の同意語とこれを見なして一往はまたなんらここに拒障なかるべしということである。すなわち、

「言語」が「ことば」にたいし、いいうべくんばそのメタことばであること、このことを文献的に窺わしめるだけならば、なにもとくにアカデミックにひらきなめるほどのいとなみにあらず、そもそもいまここには、そんなに溯って古いところからはなしをはじめめることはないから、記憶に揺曳するかぎりからちよいと散漫に徴証をえらびだすだけにてもすでにこと足りると思うままに、まずは一つ、天隠龍澤が編むところの『錦繡段』のその自序の一節、

古人ノ曰ク。詩ニ参ズルハ、禅ニ参ズルガ如シ。詩

ヤ、禅ヤ、其ノ悟入ニ到ルトキハ、則チ言語ノ及ブ所ニアラズ。(原、漢文)

ちなみにいう、いま、いわゆる外題げだい学問、書志のことにわたるとなみはそれ自体においてはここに無用なれど、溯れば慶長勅板を幕あけに元和、寛永と爾来ひさしく江戸の中葉までに刊行された『錦繡段』の版種のいまだこれをごとくは尽しえぬ数にのぼること、これだけはたしかである。もってその流布、推して知るべし。月舟寿桂の手になる注釈『錦繡段鈔』、またひろく世に行われた。(これを凌ぐにはいたらなかったもせよ、宇都宮由的の同名のポピュラリゼイションまたそれなりには世の迎えたるところなるべし。)これを以てしてのみにても、「言語」と、この二字の漢字をもって代表される漢字語がそれ自体において俗耳に浸透しえていた漢語であったものと見ることに、たれかここに異見あるべき。けだし要するに、このたぐいの推定は、もし必要とあらば、かれこれ、さらにしかるべく適切な資料から別途おなじく、いづれもさながらに坦々、ローマへと導かれうべきである。

そこで、つぎに、徴すべき用例との偶合のその年代を室町から江戸へさげ、もう一つ、それ自体においていっそう俗耳になじまれたるべき文献、俳論書として名のきこえた『去来抄』から――。

惣じて、さび、位、細み、しほりの事は、言語筆頭にいひおほせがたし。

たまたま以上の二例のうち、『去来抄』にみるところはこれを「筆舌に及びがたし」といいかえるべきたぐいではあるが、それを超えてどのみち二例ともひっきょうはその想をおなじくするもちいざまとまたいすべきである。せつかくもって、もう一つ、別の文脈のものを書きだすことにするならば、その引拠は、学僧盛典が述作の『倭語連声集』(元文二年刊)。

○梵土ノ音韻連声ノ一函ハ、竺邦ノ常例ナリトイヘドモ、初学ノ者容易ニ通ジサトスコトアタワズ。予諸衆ニ対シテ談ジテ曰ク。夫レ此ノ言語ノ法ハ。特リ竺邦ニノミ在テ。連声スルニアラズ。常ニ倭国ニ在テ。此ノ語法ヲ弄ブ。何ゾ彼ノ国ニノミ関乎。

○已下正シク連声ノ例ヲ挙テ。猶ヲ倭邦ノ言語、梵土

ノ語法ニ能ク同ズルコトヲ述^ルン。

ちなみに、『倭語連声集』は、むしろ単語を指すに「コトバ」の形をもつてし、漢語「言語」と倭族語固有の「ことば」とをとかくもそれなりに使い分けているけれども、いまさしあたつてはここに意味にわたること、すなわち「言語」の多義についてその腑分けを試みることは、それ自体のための解釈学的分析にまでふみこむのわざは、これを考慮のそとへはず。

それより、そもそもさきに引く「言語ノ及ブ所ニアラズ」のこの「言語」は、なんと読まれたか。(なにもとくに『錦繡段』に俟つまでもなく、もしその気になれば別途その徴証をここに他の文献からさし替へうべきこと、容易にあれこれと同じき用例を拾いあつめうべきこと、いまさらにこれまた言うまでもなし。) こんにち「筆舌につくしがたい」という言いまわしは、むしろ書面語に属する、そういうスタイルまたは感觸の表現であらうが、いっそなん世紀もむかしの民衆は「人ノアガメウヤマウ事ハゴンゴニオヨバヌ儀デコザッタ」(原ローマ字、天草本平家物語)など、「ごんごに及ばぬ」と

いう言い方をこのんで口にしたとおぼしい——、たとえよそゆきの言いまわしではあったにもせよ。あたかもよし、かのキリシタンが『日葡辞書』に「ゴンゴ」の項を検めるならば、慣用としての「ゴンゴニオヨバヌ、ノペラレヌ」の成句を例示する。しかしながら『錦繡段』のばあいにはその文体にかんがみて「ゴンゴ」ではあるまい。いな、時代はくだるけれども、ことばのことを職とするたちばからのペダンテリーにやっぱり執して証拠をあなたさまにかかけるとならば、題簽に「旁訓」とうたつて、けだし童蒙のために、すなわちこの方面において活躍した苗村丈伯が、ここに、逐一、洩らすところなく、かなづけを施せる『錦繡段』(元禄五年刊)あり、「ゲンギョ(ノオヨブトコロニアラズ)」と。いままさらながらといわばいえ、期待どおり。(そして、これまたせっかく言い添えるならば、この、漢音にもとづくゲンギョの形が本来——たとえば「論語」をリンギョと読むばあいほどにスタイルとして格式ばつてはいなかつたにもせよ——やはり書面語に属せしこと、これを裏づけることは容易である。)

ものによつては、すなわちたとえば『去来抄』にみる上引の例のばあいのごとき、かくのごときにおいては、これを「ゴンゴ」とよもうと「ゲンギョ」とよもうと、よみ手のままにまかされていたでもあろうが、せっかくわざわざ「ごんご」とかなづけを施してある例をも、これまた一つ。

凡そ類集(ココニテハ語彙ノ分類ト配列ノコト——引用者)初には乾坤の類、次に(中略)、終に情状態じやうじやうたい、ごんご等の言語の類也(蜷縮涼鼓集 元禄八年刊)

さてしかしながら、もともとゴンゴとゲンギョとのつかいざまの見てくれについてここにそれが所述として自己目的のばしよにあらぬからは、あらあら以上、もはやそれはこれまでにて打ち切る。たとえば最後の例は、たとえかりにかなづけがそこになくともそのばあいにもここはおそらくゴンゴ、そこをもしわざわざゲンギョとよんだらいつそゆきすぎのきざともの笑いになりしなるべきゆえんについてなどまで、いまここにそれらに筆を及ぼすのわざはすでに無用とする。

もっとも別途また、共時態を通時態の帰結としてう

けとめる、すなわちこのタームズにおいて言えば、もはやこんにちでは、「言語道断」と熟したこの成句をのぞいてゴンゴの形は残っていない。(ゴンゴの形がひとりこの成句に生きのこっていることには、それなりに歴史的にもとよりそれ独自の意味がまたそれ自体に

おいてそこにあるべきであるが、いまそれはかたわらにひかえしめ、それよりもここにレレヴァント、もつてそのかぎりこれについて一言しておくべきは、かつてのその適用の範囲はこんにち見るがごとき限定した意味においてにのみに許されるものではなく、その文脈の如何にはかわらなかつたこのこと。このことは、これとうらはら、じつはこんにちの「ゴンゴドードン」は、これを昔ながらに「言語道断」と書きはするもの、いまやただこのように書いてそのように口にのぼせるだけの形であることを教える。すなわち、このことは、すでにそのかぎりでは、それ自体における「ゴンゴ」の形はその生命をすでに失っているものと見るが「共時論的」に正しいの謂)。つぎにまた、ゲンギョの形、この方は、いわばゴンゴのように未練がましからず、け

だしもともと本質的に口頭レヴェルの表現には属せざりしがゆえに、きれいさっぱり、すでにいまでは死んでしまっている。(わたくし一己としては言語学をゲンギョガクとも仰せられた、いまは故人となられて久しい、偉大な先覚に親炙していいではないが)。

いまやここにことわりのその趣くところ、おのずから落ちてゆくべきすじとしてのそのことの重心はゴンゴの形に係る、(なかんずくに、そのようにわたくしはふむ)。そして、この本質は、語形の問題に属するにはあらず。すなわち、「言語」という漢字語が、かつて浜つてそのかみ、漢字のご本家から拝借した、いいうべくんば(種姓のただししい「漢語」であること、そしてその具体の用例を——いま挙証はそれが容易なるがゆえに略けれども——あちらさまの古典に浜つて徴するとき、それが概念的にいまわれわれの口にするゲンゴのこの形のその慣用に大略そのままあたりうべきことは、いま日本語としてのゲンゴのこの形が言語文化の歴史のタームズにおいてヨーロッパのことばからの翻訳であることをいなむことにならぬ——。とすれ

ば、いな、最も適切な翻訳語たるゆえんのものであつたとすれば、もはやその歴史はいまにわかに本稿の範囲において処理しうるのかぎりであらぬ。(けだし、それは、別途、かずかずのモノグラフとして独立にまずものさるべきである。ひとつ手はじめにたとえば「明六雑誌」を洗ってみるいとなみからだけでも、そこからそれなりにアカデミックの論作が生れうるであらうし、あるいは西周の述作に漁って明治の漢語としての「言語」を明治文化のタームズにおいて把えてみる試みのごとき、課題はいくらでもあるであらう。そして、ここにはいろいろの視野と迫り方があるべきである。すでにこれについては、たれかに手がたい実証が文献学的になしとげられているかを知らぬが、しかし、たとえば「言文一致」とうたったときにこの言いまわしの成立を歴史的にささえた背景にはすでに「言語(ゲンゴ)」の形が広く知識層になじまれていて、もって「言語文辞」の慣用からこれを縮約した形として「言文」の表現もまた生まれえたのではなかったか——、など)。

もはや「方言」については多くを展べぬ。しかしこんな用いざまが浜って平安初期の文献にうかがわれる、「毛人方言」と。これは、おのれ倭族としての支配層がその国家統一の見地に立って呼んだ大八島、じつはこの倭族よりもさきに、——いまの日本人は、他の、東アジアないし東北アジアの人びとにその体質を比べてとかく多毛のようであるが——、もともとの、いわば純血の倭族とはちがい、多毛をもって目だった種族が住んでいて、その、かれらの、これまた倭族のとは異なることば、こんにちの立場でいえば異系の言語として倭族語に排他的に対立する「毛人語」をややつていた、そこを倭族の立場から把えた表現であった、(とおぼしい)。(「毛人」のその毛深さを倭族はきらっていたとおぼしく、それゆえの慣用なら万葉集に例あり。また、佐伯今毛人、この人名にその例をみるこの毛人は、エミシとよむをそのならいとする。)

よこ文字の dialect にあたりうる概念として、はたしてつぎにふれる慣用がすでにどこまで浜って古くに

生れていたか、それは別として、とにかくクニキヨウダン(国郷談)という形がかつては一般であった。これがむかしの民衆の口にした生きたいいまわしであった。一口にいってしまえば、こんにちわれわれの口にする「方言(ホーゲン)」の形の確立のその背景と過程は、これを近代日本の歴史全体のコンテクスト——たとえば琉球の悲劇を忘るべからず——からながめて以てはじめて真にときあかされるべき課題と考えられる。

いまやひるがえっていう、題して「言語」と「方言」。『言語学』のたちばをもつてすれば、ことは、それ自体においてはそれぞれに独立のそれら二つの名詞をつなぐ、しかしながら、このつなぎの小辞に係るべきである。いわばこの「と」をなんとよむか。すなわち両者相互の意味論的対立(またはくいちがい)をその相関性においてどのようにとらえるべきか——。

しかしまた、いまは、このことを言うのみにて閉じなければならぬ。すなわちもって閉じるにあたり、いまだ目にふれていくばくの日もあらぬある文章からそ

の一句を引くことにその筆者のゆるしを乞いたい。なぜここにひとまずわざとひとさまのことばを引いておのれむすびに代えるかにそのゆえんの釈明はしない。それよりか、いまは現実にはのぞみうべくもなければ、もし紙幅さえゆるされうるものならば、わたくしとして展開せまほしきゆえんのは、せつかくの引用をめぐるかすかすのコメントあるいはわたくしなりの敷衍である。たとえば日本では Low German(古くは「Dutch」を「低ドイツ語」と「語」を添えてこれを和げるけれども、それはドイツ人のあざかり知らぬところであるとか、オランダ語をかつてオランダ人みずからが Nederduitsch と呼んできたことに日本人が奇異の感をいだくとしてもこれは言語学のあざかり知らざるところとしてよろしかるべしとかといったことどもにそれはとどまらぬ。ことは「根源」に派る。そのかぎり次のことばにそのまま手ばなしに満足するものにはもとよりあらぬ。それでは、いわく——。

「ある言語が、「独立した一つの言語」なのか、それとも「ある言語の方言」なのか、という問題は、言語学的

な違いの問題であるよりも、しばしば政治的ないし文化的帰属の問題である。) (中川裕 パン語の村の「知恵の言葉」三省堂ぶっくれっと No.91 一九九一・三月)

縁起(レトロスペクト)

ここぞとばかりにテーマとしてのことばをそれらことばそのもののために、ためにすなわちあなたさまに、そもそもものならぬことばとしてのそのままにすえさだめて、このんでえらんで、しかり、ものならぬものとしてのそのありさま、そこをめぐってついにこのたびこのすさびに筆を弄するに至れるその背景としてのまたおのずからの経緯、これ、それなりにならぬなりにもとよりそれとしてさらにそれ自体においてなきにしもあらざりつるのそのゆえん、いささかこれをここにあらからさまにし、もってことばの縁起をせっかくのちのちの記念にとこそ、とにもかくにもまずはし
かじか。

おとぎばなしともなれば、やはり固有の民俗の香り

がえもいえずいまもほのぼのとそこに漂い、いとけなきわらべごころへと「郷愁」の糸すじがほぐれて、それはそれなりに雲霞のあなたの幼な子の日を偲ばしめる老いの感傷のよすがとなるが、ひとついまうちついに英語の言いまわしそのままをいとわぬならば、すなわち fairy tales とこのたぐい、ここに心を躍らせておとぎばなしからは味わえぬいわばエグゾチックな空想の世界をかけめぐったいまだまた幼かりし日、ようやくなじみそめた異国のことばのうちから、これが母語のばあいにもなれば、それゆえ、また、はなしが別であるうもの、すでに大人になってしまつてのちにはほとほと出合いの機失せつるままの語が、どっこいしかしながら、やっぱりいまに記憶の底ふかく、さすがかれこれ眠ってだけはある——、どれどれ、たとえば忘れもしないホップミサム (hopo'mythumb) といった。

こんなおどけた形じゃないが、ひとつまたここに imp——、これは、悪魔の小倅のことでしたっけ。そういうこわっぱに、さてまださんぬるこれは昨秋のこ

と、そのおやじが書かせて、どなたにもご存じのごとくに悪魔にはしっぽが生えております、もってこのおやじの尻穂のみえみえな一文をさる雑誌が舞台にのぼせた次第にござります。どうやら正面かかげる旗幟とはうらはら、アジテイションの方がいっそお好みらしき勸進元のお気に召してのまにまに大みえ切つてとざいとおおざい、「言語と方言——『言語学大辞典』の刊行によせて——」。

わわめく六方に幕切りこととうとましかれど、せつかく少し褒めても進ぜましようならば、なかなかに咄嗟のすてぜりふ達者な、すなわちこの狂言の立役は、おのれ不敏にして非漢族についての知識にうときゆえ、つい耳にとめるの機に出くわさなかつた片かな名まえの、スフパートルならぬフフパートルとやらいう男、きけば出自はモンゴル族のただし中国人のよし、「オールドス語」なる立項にめくじら立ててひがんで、この項目のその筆者にたいしてばかりか、ともども辞典の主幹にもまた、せりふまわしくちさがなくからんできた。しかしながらそのあてつけがましきさのいやみにし

るき日本人はだし、どっちみちすでにこれたれの目にも紛うかたなくあからさまなる、すなわち悪魔おやこのそのこもごも力を協せて響ぐところとして、ただに狗肉にのみにあらず、合作共演ぶーんと鼻をつくかざは悪魔の体臭さながらというべし。もつとも嗅覚というこのあまり上等ならぬ感覚にわたしが敏感であるとするれば、それはちつともほめたはなしにあらぬもの、とにかく悪魔の感覚は人間の感覚とはちがっているのだ。健康な人間の、したがってその健康な学問感覚をもつてするかぎり、「オールドス語かオールドス語か——『言語学大辞典』を繕いて社会言語学の立場から」となり、「言語と方言——モンゴル語を例に『言語学大辞典』にたいして私見を陳ぶ」となりの、このようなタームズにおいてはじめて、ことを取りあげべきはずのところである。もつともまた、たんにこれをもってでだけでは、いまだわたしの含意の、その、ひろくいずれもさまに隅から隅までいっつとばかりに伝わるべくはあらぬ、——けだしあらかじめ悪魔おやこの狂言台本に前もって目を通してもらっておいででないかぎ

り。しかしいまその辺のそこは、結局どうだっかってかまわぬ。ことばを十分のご披露へいたさぬとの責めはすでにこちとら覚悟のまえ、悪魔の御託なんぞ、よじれるはらの皮をこらえつつこれを黙殺するまで。ただ、あえてわたしがせっかくやっぱり「悪魔」と、たとえその貫禄とはなくとも呼んであげる、けちな尻穂だけを恥ずかしげもなくちらつかせているかれ親方、身の程わきまえぬちんびらの、しこ名にいいひがめてへっぼこバートル、もひとつひねってひょつとこバートルを、えへん！ おのれに仕えはんべらしめ、もってやつを操っていちおう奥ノ院に鎮座します——とまづは敬ってやっておきましょう——そのご本尊の剣ぐに及ばぬ化けの皮についてこのついでにちよつとだけそれへの資料にふれておくことならば、これはかかって本稿の筆者のその人間としてのインテグリティのため。けだし、悪魔風情につきあいおせるわたしではないのだ。もってまた『論語』の至言にこたえて言わまく、「ワレツイニ小人ノ儒ニ与スル能ワズ。」

まあ中篇小説っていうんでしょうな、そのうちのほ

んの一ページにだけだから端役も端役としての登場をせしめられてにすぎぬけれども、一生のあいだに、妙な目をも見るもんだ。なにもいやみつたらしくあくどい表現のすべてを尽して長々と引用することはない。ちょいと、みなさま、いかが思召されますか、「東田遥の師匠らしい訳者の文章は、まるですすり泣くがごとくつづく不思議な擬古文で、また特殊な文字づかいと特殊な句読法であった。」と。（言い得て妙と思われる向きもあるとすれば、あえてなにをかもどくべき。

ごもっとも、ごもっとも。そんなじよそらに、滅多に真似られますまい。あられもない作者の小細工は、さながらへどをおぼえしめるまでにうす汚くけがらわしく卑しく、もってスキヤングラスに造型されている主人公、東田遥なる作中人物のそのモデルがたれなるかを、かれとしては自業自得、身から出たさびなるべしとは言え、決定的に同定せしめるのかぎにわたしを伴きあわせているのだ。それでなきや、どのみちかばかしいはなしだが、なんでわざわざ道化にひっぱりだされる要があるのか、作者の腕が知れぬ。（いまい

う三文プラスマイナス一文小説にわたしが出てくることにせつかく注意をうながしてくれたご仁は一人にかざらぬ。)いうところのその小説とは、『水獣』と題する、そもそも曾野とか亡き有吉になんざ比ぶべくもあらぬ、せいぜいが二流どこかそこいらがまずまずの下種の泡沫作品。あるいはこの女、暴露小説へ吐きちらかすことによつて、なにか「東田」に恨みを晴らさんとしていたのか、もつてはたから窺えぬ秘密の復讐が企てられているのだとすれば、それは「東田」のみの知るどころ、そんなやからたちはしちりけっぱいだ。しかし、おのれかれらとは人間としての類型を異にする「貴族」である。この誇りをもつてこの誇りの高みからかれらにのぞむのみ。

もし副題にこめたところを敷衍するならば、学問にたいするわたしのディスポジションに根ざして人目には蛇尾さながら、いな、いっそしっぽの切れたとかげとさえ映るか知れぬついにそれ自体において結構(コンポジション)つたなきトルゾーであろうとも、どのみちやはり愛言愛知の精神に捧げるところのそれはそ

れなりの脛説である。この精神にこたえて一篇をもせるそのたまたまのきつかけがおのれいなみがたくもこもも陋劣な俗物根性にたいする本能的な拒絶にありつるを黙して秘するつもりはあらぬ。しかし、このしあわせ(偶然)をあからさまにしておくに、ここに憚るところ、また、なんらあらぬ次第。以上。

みぎを以て縁起を締めること、すなわち件のごとし。蛇を描くに足をくわえ、もつて江湖に一祭を博するのいたずらはさらにえらぶところに属さぬ。しかもあえてもとめて博雅の土にあらためてその賢察を乞わまは、おのれいやしくも竜の足を悪魔の血にまみれしめるの穢れからふかく身を避けて爪を引くのみ、よつて、擬するに竜鱗一片のエッセイ、いま記するところの潜晦の辞を以てすなわち書後(エピローク)とするに、あやまつところなくここに款識を勒するゆえんと。

一九九一青陽復活節穀旦 楓梧守春堂 不雨讀齋

(一橋大学名誉教授)